

自己理解・他者理解

松井 明子・佐々木一也

「自己理解・他者理解」を企画するにあたって

松井 明子

学生部の業務には、クラブ・サークル関係や奨学金などの支援とともに学生の人間的な成長発達の支援も含まれている。また学生相談所も学生の人間的な成長発達を支援している。このことは、学生部業務全般にわたる理念でもあるが、具体的にはキャンプなどの課外教育プログラムの中で「コミュニケーション・対人関係の大切さ」「自分の生きていく上で大切にすることは何か」などについて、学生に考える機会を提供している。

最近の学生たちは、インターネットや携帯電話などの情報機器の発達により、瞬時に広範囲の友人たちと情報交換が可能になってきた反面、直接に対面してのコミュニケーションに苦手意識をもつ学生も見受けられる。大学に入学した早々、まず仲間作りに必死になる学生は多く、その中で周りの学生に合わせようと明るく振舞って疲れ果てる学生にしばしば出会う。また傷つ

くことを恐れて、友人達と深い話し合いを避ける傾向もある。このことはこの20年間で学生相談所の相談内容の中で対人・心理領域の占める割合が、40.7% (1977) ⇒ 54.0% (1997) と増加していることから窺われる。

最近の調査結果（私大連学生生活実態調査・立教大学版2002年10月実施）では『大学の進学目的を三つあげてください』の問いの第一位は「自分のしたいことを探すため」46.6%、第二位は「大学卒の学歴が必要だと思ったから」46.3%となっている。受験のハードルはあるものの高校を卒業すると当然のように大学生になってしまう学生たちは、日々授業やサークル、アルバイトに忙しい。「自分とは何か」「自分はどのように生きていくのか」この問いに、じっくり考えることのできる適切な機会に恵まれる学生は多くはないのではないかと。

学生部は、これまで課外教育プログラムの中で提供してきた「他者とのかわりの中で自分を見つめ、自分の生き方を考える」ことを、事務局局からの企画提案授業として展開したいと2年前に検討を始めた。学生生活課と学生相談所が担うことになり、とりあえ

ずこれまで学生部のプログラムでお世話になった心理学や哲学関係の先生方を思い浮かべながら具体的な企画を立てることにした。一番先に決めることで、最も大切なことはコーディネーターを探すことであったが、幸いにも佐々木一也文学部教授が学生部のねらいを理解してくださり、引き受けていただけたことになった。そして佐々木先生との話し合いで、学生部や学生相談所が現場で感じている学生状況とともに、家族と自分、自分というものの把握、性格テスト、友人と自分（他者とのコミュニケーション）、人生の意味などのテーマから、多角的に「自分をみつめる」ための授業構成ができあがった。講師の先生方との連絡調整、打合せ準備を済ませると、初めての取り組みであり提案部局としてどのような働きをすればよいのか戸惑いもあったが、とりあえず授業には毎回学生部員が出席し、学生の反応などを含めて授業の様子を見ることにした。

履修登録が完了するまでは、果たしてどのくらいの学生が受講するのか、学生たちの受講態度はどうか気がかりであった。また性格テストなどの実技を行うことについては、学生相談所では少人数なら問題なく実績もあるものの、大人数の教室でうまくいくのか等の懸念もあった。

しかし、開講されると150名近い学生が出席しているにもかかわらずほとんど私語はなく、授業態度は総じてよ

かった。また中間で行われた討論会では、自分の内面を語るというなかなか勇気がいる授業のときも、学生たちは指名を受けるとそれぞれ自分の考えを発表した。我々は改めて、学生たちの「自分をみつめる」ことへの関心の高さと真摯な姿勢を知ることとなった。12月の終盤の授業では学生相談所の内藤氏が、相談所から見た学生達の様子について統計をもとに説明した。あらたまって相談所に行くことは弱い人間のすることで、どこかマイナスイメージとして捉えていることが窺われるが、それは違うという話を、学生達は真剣に聞いていた。

人生の生き方という普遍的な命題を、複数の先生方がそれぞれ心理学や哲学の専門領域から講義をされた半年を振り返ると、90分の後ろにある膨大な知の資産に圧倒されたと同時に、これはいかにも立教らしい特色のある授業になったのではないかと思える。佐々木先生は出来れば1年生に受講してほしいと後期の開講を提案されたのだが、18歳に限らず人生の経験を重ねた年代の人にとっても、多彩な講師の方々のおかげで人との関わり方、自分の人生を考えるヒントが随所に散らばっており、企画当初の予想をはるかに越えた魅力のある内容となった。企画提案部局として心から嬉しいと思う。

まつい あきこ

(本学学生部学生生活課課長)

「自己理解・他者理解」を担当して

佐々木一也

前述のような学生部の企画を受けて、さらにさまざまな経緯があり、最終的に私がコーディネーターを引き受けることになった。それが2001年度前期のことであった。

1. 実施前の準備段階

既に述べられた学生部の考え方に基づいて、対象学生は立教大学全学部の1年次あるいは2年次生が想定された。もちろん全学共通カリキュラムの精神から言って、全学部全学年の学生に開かれることは言うまでもないが、特に大学に入学して間もない学生に、将来を考えさせ、それに対応する自分を早めに見つめさせようという趣旨である。

そして、学生部との数回の打ち合わせの中で、「家族」「自己」「友人・コミュニケーション」「人生の意味」をテーマにした連続講義で行うことが決まっていった。その趣旨は、次のようなものである。自己を知るには他者との関係を欠くことができない。最も身近な他者との関係からはじめて、自己を見つめて、さらに大きな社会との関係を自覚するようにもっていく。そのために、まず、家族論から入ることに

した。それには、自己を自己として見つめるのではなく、家族の中で育まれる関係にある自己から出発することによって、単に自分から見た自己という抽象的自己像ではなく、他者の間で通用する具体的自己像を得させよう、というねらいがある。その上で、自己を自己として自ら反省する。それを受けて、家族を出て、友人という家族外の社会での人間関係において十分に自らを構築できるような体制を作る。ここではアサーショントレーニングという均整の取れた人間関係を作れるようになるための自己訓練法を学習させる。この上に、自己の奥行きを確認する意味で、自己が生きる意味を哲学的に考えさせようという講義が締めくくりとして置かれる。この授業の内容は以上のような構想に基づいている。この構想も、学生部と私の打ち合わせの中で、学生相談所や学生部窓口での学生対応の経験にもとづく学生部の持つ知識やノウハウの助けを借りて、はじめて成立したものである。

この授業は実習系のものではなく、講義を中心に展開される。ただし、学生に自分を見つめてもらうためには単に講義を聴かせるだけではだめで、学生にはできるだけ作業をさせるという学生部の方針があり、各担当者はそれを心がけて授業運営を行うという確認がなされた。それとも連動して、自己理解に資するために、TEG (Tokyo University Egogram) という性格テス

トを学生相談所カウンセラーの指導の下に受講生を対象として実施することも決まった。

開講学期についても議論があった。新入生が大学で初めて授業に接する前期は、まだ彼らが大学に慣れておらず、自己理解や他者理解に対して十分な問題意識が育っていない可能性もあると考えられ、できれば後期に開講したいということになった。このことは全カリ事務室とのやり取りの中で承認され、この授業の後期開講が決まった。そして、私が2001年度後期から2002年度前期にかけて海外研究に出るという事情があったために、2002年度後期開講ということに落ち着いた。

その上で、具体的担当者探しに入り、「家族」に非常勤講師として安達映子、「自己」にコミュニティ福祉学部の福山清蔵、「友人・コミュニケーション」に非常勤講師として平木典子、そして性格テストに新座キャンパス学生相談所カウンセラーの福原久美の各先生のご担当が2001年前期中に決まった。そしてその年の9月には、開講1年前であったが、早くも第一回の担当者連絡会が開かれ、授業の趣旨と運営の方法が担当者に徹底された。

その後、私は1年間の予定でドイツのフライブルクに滞在し、もっぱらメールによる連絡となってしまったが、福山先生に副コーディネーターとしての役割をお願いすることによって、無事に事務手続きは完了し、後は開講を

待つばかりとなった。全学共通カリキュラム運営センターの方針によって、総合B科目については自動的に1名のティーチングアシスタント(TA)がつくことになっている。人選は副コーディネーターの福山先生にお願いして、コミュニティ福祉学専攻の大学院生に決まった。

私が帰国する直前に、学生部が主催して、コーディネーター抜きで担当者連絡会が開かれた。そして、開講の趣旨と、授業運営方針が再度確認された。

私が帰国して、2002年度後期に入り、いよいよ授業が開始された。おおよその流れと、具体的な講義日程とその題目および授業関連の打ち合わせなどの作業は以下ようになった。

2. 実施の概要

9月24日 第1回 オリエンテーション「自分を見つめる」担当：佐々木、陪席：学生部職員、8303教室

授業終了後、6号館佐々木研究室にてTAの大学院生と仕事の打ち合わせ。

TAに依頼する仕事内容：出席票の配布と回収および整理、レポートの回収および整理、教材のコピーおよび配布、各回の授業記録や討論記録の作成、各教員の授業法の観察など。

佐々木が当日の授業内容と学生

の反応について、即日 E メールにて、各担当者および学生部に報告。

10月1日 授業開始30分前、TA および安達先生が佐々木研究室に集合。教材の確認およびコピー、授業内容の確認などの打ち合わせ。

第2回 家族1 担当：安達・佐々木、陪席：学生部職員
授業終了後、コメントペーパー回収、安達先生に手渡す。8号館前にて解散。

佐々木は即日 E メールで当日の授業を報告。

後日、学生部内部での話し合いの結果、授業を録音する希望が表明される。各担当者の同意を得て実施されることになった。

10月8日 授業開始30分前、TA が佐々木研究室に来訪し、当日の授業の手順について打ち合わせ。教室前にて安達先生と合流。

第3回 家族2 担当：安達・佐々木、陪席：学生部職員
授業の最後に次週提出のレポート題目が提示された。

授業終了後8号館前にて解散。TA と佐々木は6号館の研究室に戻り、出席票の整理をして出席簿に記入する作業を行った。

佐々木は即日 E メールで当日の授業を報告。

10月15日 授業開始30分前、TA が佐々木研究室に来訪し、当日の授

業の手順について打ち合わせ。教材コピーの作業。教室前で福山先生と合流。

授業開始前に先週のレポート回収の作業。

第4回 自己1 担当：福山・佐々木、陪席：学生部職員
授業終了後、コメントペーパー回収、福山先生に手渡す。8号館前にて解散。

佐々木は即日 E メールで当日の授業を報告。

10月22日 授業開始30分前、TA が佐々木研究室に来訪し、当日の授業の手順について打ち合わせ。教材コピーの作業。教室前で福山先生と合流。

第5回 自己2 担当：福山・佐々木、陪席：学生部職員

以下の手順はこれまでの授業に準じて繰り返されていった。詳細は省略して講義題目と担当者のみ記す。

10月29日 **第6回 性格テスト**

担当：福原・佐々木、陪席：学生部職員

11月12日 **第7回 総括討論1**

担当：佐々木・福山、陪席：学生部職員

11月19日 **第8回 友人・コミュニケーション1** 担当：平木・佐々木、陪席：学生部職員

11月26日 **第9回 友人・コミュニケーション**

ケーション 2 担当；平木・佐々木，陪席；学生部職員

12月10日 第10回 人生の意味 1

担当：佐々木，陪席；学生部職員

12月17日 第11回 人生の意味 2

担当：佐々木，陪席；学生部職員

2003年

1月7日 第12回 総括討論 2

担当：佐々木・福山，陪席；学生部職員

1月14日 最終レポート提出締め切り

1月25日 各担当教員の成績締め切り

1月28日 最終成績締め切り（佐々木が取りまとめ，教務事務センターに提出。）

以上のように実施された。これを見る限り，この授業にはかなりの準備や作業の時間がとられていることが分かる。学生にも少なくない学習作業が課せられた。授業についてのコメントペーパーは学生自身に直接フィードバックされるので，学生にとって利益になるものだとしても，性格テストを除く4テーマのそれぞれに，2000字程度のレポートが次週提出締め切りで出され，2回の討論会には自分の自己認識について，他の参加学生たちの前で意見を述べなければならなかった。最終授業の後には，1週間以内に提出しなければならない最終レポートが課せられ，全部で5回のレポートを義務づけ

られた。それぞれの授業の中でも，書き込みシート式のプリントがしばしば配布され，自己を見つめるための作業，周りの席の学生同士で結果を見せあい，話し合う作業などが繰り返された。2単位科目として大学設置基準に示されている90時間の学習は十分に確保されたと考えられる。

登録学生は，科目等履修生，f-キャンパスの他大学学生，立教女学院短大，立教高校（新座，池袋）などの学外者22名を含めて150名。常時参加していたのは110名前後であった。各担当講師の熱意ある講義と有効な作業が行われて，出席学生たちの受講態度は積極的であり，私語もなく，各回充実した授業となった。これには陪席した学生部職員も強い印象を持ったようだった。頻繁にレポート提出を求められ，それらの総合として成績評価がなされるので，出席者の減少も予想されたが，大きな減少はなく，最終レポートを提出し，単位認定を願い出たものは101名であった。

全ての授業にはコーディネーターの佐々木が参加し，TAの大学院生とも相談して，その内容を整理し，記録した。それは討論授業に使ったのみならず，各授業の直後にEメールで全ての担当者および学生部に報告した。本来は全ての担当講師が全ての授業に参加し，他の担当者の講義を聞くことで，授業全体としてのまとまりを持ちつつ，それぞれの問題意識を喚起しあい，

緊張を持って授業が連続することが望ましい。今回は、非常勤講師も専任教員も、諸般の事情でそのような参加措置を講ずることができなかつたので、やむを得ず、このような連絡方法をとることにした。その結果、不十分ではあるものの、各担当者間の授業内容の連絡が図られ、学生にとっては講師が変わっても、内容が自然に連続するように組み立てられることができた。コーディネーターにとっては、この作業はやや負担にはなるが、この種の授業をリレー講義形式で行うとすれば、どうしても必要になってくるだろう。

3. 提案部局の役割

この授業における学生部の役割は、単に企画段階におけるコーディネーター選任と授業担当講師選任および依頼、授業シラバス作成への参画、授業への陪席、講義の録音記録作成だけではない。コーディネーターによる授業報告に際しては、的確なコメントを頂き次の授業につなげる参考とさせていただいた。また、学生部としても学生の参加態度や作業態度から学生部としての学生対応に関するヒントを得ることができたと思う。特に、討論授業に際しては、学生の意外な反応などもあり、学生部としてもたくさんのヒントを得たようである。また、討論に際しては、学生部が日頃窓口対応などで得ている学生像や学生生活調査で得ているデータなどを、普段は陪席している

学生部職員が直接紹介する時間も設けて、学生の自己理解に役立てることもできた。学生部が授業に直接に参加したことが学生にも積極的に支持されたことが、その日の学生によるコメントペーパーにはっきり出ていた。学生は自己像を構築するために他の学生の自己像を知りたいと考えているようだが、特に学生部が収集している学生関係のデータから、立教大学の学生に見られる全体的傾向を知りたいと彼らは思っているようだ。調査報告書という形ではなく、直接学生部が授業の中で学生に接しつつ、学生たちの動向を、授業のそのつどのテーマに関連づけて紹介することが、学生にとっても自分の問題と直接に関連づけられることになって、学習としても効果的だったかもしれない。

4. 履修学生の特徴と授業の対応

最後に、この授業に参加してくれた学生たちに関して、私が感じたことを述べておこう。

私が日頃学生の自己理解や他者理解に関して、「自分の自立の実態と、自立しなければならぬという建前が大きく乖離していて、それが学生を苦しめているのではないか」というような印象を持っている。それは、単なる私の個人的仮説に過ぎないが、この授業に参加してくださった新座キャンパス学生相談所カウンセラーの福原先生と最近の学生たちについて話をしている

も確認される印象だ。学生たちの日頃の心の問題は、自立といういわば強迫観念のようになった自我意識が、ひとつの原因となって引き起こしているように思えるのだ。

討論授業でも学生の感想として、「他の学生の意見を聞いて、自分の悩みが実は他の学生の悩みであることを知って安心した」という類のものが結構ある。授業の中でアサーショントレーニングを取り上げたが、それは学生に好評であった。それは自己を他者に受け止めてもらえるように表現するということを目指す訓練なのだが、学生にはこれが自分には難しいと認識されているのだ。自分はきちんと自立した自己として、自立した他者に対して自分を表現しなければならないと強く思っている。しかし、現実には自分はそれほど自立もしていないし、強くもなく、他者の否定的反応をあらかじめ予想し、それを恐れ、コミュニケーションに尻込みしてしまう。また、表現すれば強すぎて相手を傷つけてしまう。しかし、一方では寂しいのでケイタイでつながった友達関係をたくさん持っている。しかし、なかなかコミュニケーションが深まらない。ケイタイでつながっているのになぜか癒されない孤独感。あるべき自己と現実にある自己のこのような葛藤が、今の学生たちを苦しめているのではないか。

私の担当した「人生の意味」の授業では、私が最近の若い人を縛っている

と考えている「自立の大切さ」を、どのように学生たちが自分で理解しているかアンケートを実施して調査してみた。回答は90通得られた。

「あなたは今、自分は他人と依存しあって生きるより自立して生きなければならないと思いますか」という質問に、イエス（Y）が48人、ノー（N）が18人、どちらとも言えない（U）が24人であった。過半数が自立して生きなければならないと思うと答えている。その一方で、「あなたは今、自分が自立して生きていると思いますか」という質問に対してはY7/N67/U16という結果になった。学生には自立の条件として「経済的に独立すること」を挙げているものが多いことを考えても、このノーの数字の多さには驚く。また「あなたは今、自分の生き方に自信を持っていると思いますか」という質問に対しても、Y22/N46/U22という結果が出ている。建前の自立と現実の自立の間には大きな溝があるようだ。しかも、「あなたは小学校時代までに家庭や学校で、他人と依存しあうより自立して生きる方がよいと教えられてきたと思いますか」との質問にも、Y18/N50/U22と回答している。幼少時代に自立するよう仕向けられてこなかった学生たちは、中学高校になって自立の大切さを説かれるようになる。大学では自立した大人として振舞うことが期待されている。

このように見てくると、学生たちが

大学でどのように振る舞い友達を作ったらよいか、また大学内で自分の地位を築き居場所を作ったらよいか分からずに、つらい思いをするのもうなずける。自立しているかのように振舞いながらも、不安に駆られる毎日。大学はこのような学生を相手に、彼らにとって最終学校として「一人前の大人」になって卒業するための学習機会を提供しなければならないのだ。

この授業では家庭における養育において自己肯定感が持てることの重要性を学んだ。自己の生育の過程で、幸せなことも不幸なこともたくさん経験する。それを人生曲線として描いてみて、自己の軌跡を確認し、不幸に陥っても必ずまた自己は回復するということを知る作業も行った。性格テストによって、自分の性格のタイプをある種の客観性を持って見つめた。その上で自己を他者に受け入れてもらうための条件を学んだ。学生たちはこのような作業を通して、自分たちの自立がどのように行われ、それがどのように自分のものとなってきたかを確認したのだ。それは学生たちにとって、単独者としての「自己」ではない自分を知ることの意味し、自分が他人の間で生かし生かされる関係を持つことをも知ることを意味するのだった。その結果、彼らは「自立は自律として実現していればよい」ということをも学んだ。

過度な自立要求は他人とつながりながら生きている我々の生活実感とかけ

離れる。学生たちはこの授業を受けて、家庭や友人との関係を大切に、自分を育てて生きたいと思うようになった。最終レポートでは「自分の将来に向けての自己選択について」という課題が出されたが、多くの学生は人間関係を大切に考えて、自分の将来を支え支えられて生きたいという抱負を語っていた。彼らの「自己意識」から肩の力が少し抜けたような気がする。

討論授業の持ち方や、学生による発表のさせ方、教員間の討論など、この授業にも課題はある。しかし、ある4年生の学生が、「もっと早くこのような授業に出ればよかった」とコメントペーパーに書いてくれたことは、この授業に関わった全ての関係者の労をねぎらってくれるものだった。

5. おわりに

以上、簡単に「自己理解・他者理解」の紹介をさせていただいたが、この授業に参加して私が得たものは大きい。今回の総合B科目の担当によって、私は学内部局の職員が正課としての授業に参加し教員とともに学生の教育に関わり、学生とともに学問を実践する試みが、授業を活性化させることを実感することができた。現在の大学では、学生のニーズに応えることが教員に強く求められている。だが、教員のアカデミックな経験からだけではそれを読みきれない憾みがある。学生を良く知る職員と協力することによってこそ、

学生の実態に即した実のある授業が展開でき、ひいては大学における学問活動全般の活性化につながられるのではないだろうか。この授業の企画は、学生部の提案によったからこそ、学生の内発的学習意欲に応えるテーマ性を持つことができた、私は確信している。私は今後このような授業企画が増えていくことを心から期待するものである。

ささき かずや

(本学文学部教授，総合B群担当)